
降る夢

芹沢 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降る夢

【Zコード】

Z6546Z

【作者名】

芹沢 忍

【あらすじ】

学生時代からの友人から新刊が届いた。しかし、開けてみるとその新刊は別の作家のものである。不思議に思いながらも送られた新刊を読んだ主人公に友人から電話がかかってくる。切羽詰った様子に不安を覚え、主人公は会社をズル休みし友人を自宅へと招いた。彼女から聞かされた真実は……

女性一人の友情話です。

(前書き)

他のサイトでも掲載したものであります。

新刊が届いた。差出人は木村真由子。高校時代からの長い友人だ。彼女は夢を実現し小説家となっている。残念ながら専業とはいかなが、ささやかながら作品を発表し、新作が出ると毎回欠かさず送つてくれるのだ。

鹿嶋安海 様

1画数が多く嫌になる自分の氏名だが、彼女の細く流れる文字で見ると何だかとても嬉しい気持ちになる。ポストから大切に取り出し、部屋に入る前に封を切つた。

出てきたのは文庫本の新刊だ。表紙を見て私は首を傾げた。真由子のペンネームでは無かつた。広告などで良く見かける売っ子作家の名前。

「おつかしいなあ：何で他人のを送つてきたんだ？」

ショルダーバッグを下ろしながら1DKの室内に入り、ベッドの上に座り込んだ。封筒の中を確かめたが何も無い。手紙が挟まっているかもと思い、本をパラパラめくつてみたが栄とチラシ以外は見つからない。

「真由子の事だから、きっと何か理由があると思うんだよね…」

スースのままでベッドへ寝転がり、俯せになつて数ページ読んでみた。面白そうだ。読むのが止まらなくなりそうなので、本の世界に入り込む前に慌てて栄を挟むと本を閉じる。独り暮らしのOJは明日に備えることが多いのだ。面倒だなあと思うけれども洗い物と入浴だけは済ませなければ。バタバタと狭い住まいを移動し、私は久しぶりに真由子のことを考えながら用事を進めた。

「恨むぞ、真由子おー」

起きて一番に田覚ましの音楽を止めながら呴いた。送られて来た本はやはり面白く、平日にも拘らず一気に読み終えてしまった。お陰で寝不足だ。幸い今は比較的仕事が緩い周期に来ている。今日の仕事は半分捨てるに固く心に誓いながら起き上ると、薬缶を口にセツトしながら玄関へ新聞を取りに向かった。

新聞を取つて部屋に戻つた途端にルルルルルと電話が鳴つた。ディスプレイを覗き込むと真由子の名前が表示されている。やはり昨晩何かあつたなと思ったのは間違いではないらしい。普段は絶対、朝に電話なんてかけてこない。多分、とても悩んだ末での電話だろう。私は目を覚ますために、まだ起き切らない頭を思いきり振つてから受話器を取り上げた。

「おはよ。どうしたあ～？」

なるべく軽く言つてみる。受話器の向ひにはシーンとしていて何だか落ち着かない気分になる。

「真由子だよね」

再び声をかけると、微かだが息を吐く音が聞こえた。私は受話器に意識を集中させた。

「…安海い。会いたいよ。直接会つて話したいことがあるんだあ」

真由子の沈んで掠れた感じの声に、心配がゆっくりと頭を擡げる。ヤバいくらいに沈み込んでいるのが手に取るように判る。そう思つた瞬間に、私は迷わず真由子を田覚へ誘つていた。

電話を切つてから、キッチンの椅子に腰かけ、テーブルに突つ伏す。会社はズル休み決定だ。始業時間まではまだ間がある。真由子もこれから家を出るなら2時間はかかる筈だ。突つ伏しながら時間を計算し1時間半寝直す事を決めてからベッドへと向かつた。置き抜けの声で会社に電話したら、おそらく風邪で誤魔化せるだろう。

真由子は大丈夫なのかな?と思いつながらも、強すぎる睡魔に襲われていた私はベッドに着くなり撃沈した。もちろん田覚ましのタイマー・セツトは忘れなかつたけれども。

軽快な弦楽の音が聞こえる。時計を見やると時間は8時を少し過ぎたくらいだ。一瞬ヤバい！と思つたが、先刻の経緯を思い出しほと胸を撫で下ろす。音楽は流したまま、改めて起き出し、まずは身支度。少し寝足しただけだが、かなり頭がすつきりした。これで真由子の話しあきちゃんと聞ける。明日は土曜で休みだから徹夜になつてもOKだ。

取り敢えずは会社に電話を入れておかなくてはいけない。ワザと声を低めて、なるべく嗄れるように、絞り出すように。受話器を取る前に声を出し、耳で響きを確かめた。よし、これなら大丈夫と演技を決めてから会社に電話を入れる。上司には厭味を言われたが、それなら辞めると思えるくらい愛着の無い会社だ。大事な友人がやつてくるのだから厭味なんて電話を切つて即忘れた。

真由子は深刻な話しをしに來るのであらうが、久々に会うのでついに浮かれた気分が顔を出す。シリアルバーの朝食を取りながら、沸かしたお湯をインスタントコーヒーが入ったマグに、次いで余った分はポットへと注ぐ。

お茶菓子は確かにこの間ラスクを買つてあつたなと棚を覗きこむ。ランチョンマットはマーガレットの刺しゅうがされた若草色の可愛いのがあると引出しへ調べる。自分の落ち着かなさに、まるで初めて彼を家に招待しているような恥かしさを感じて赤くなつた。

「頼られて嬉しいからって……程があるよなあ」

氣を紛らわせるために口に出してみるが、恥かしさはあまり変わらなかつた。

落ち付かぬに迎える準備と身支度を整えていたついに、玄関の呼び鈴が鳴つてしまい、私は氣を静めようと自分の頬をペチペチ叩いてから玄関に向かつた。

ローンキーを外すのがもどかしい。外したローンがカシャリと音を立てて落ちるのを聞き、ドアのロックを解除すると静かに押し開けた。

「いらっしゃい」

田に飛び込んできた真由子の姿はとても寒そうだった。冬の寒さに凍えていたというのもあるだろうが、それよりも心の底が冷え切つている感じがする。久しぶりの対面で私を見ても、堅い表情が取れないなんてことは今まで無かった…と思つ。

真由子は何か言いたそうに一瞬私を見上げたが、目が合いそうになる寸前に視線を逃がした。その行動が気にはなつたが、冷えた玄関に立たせたままというのは良くない。

「寒いからさ、上がってよ」

促して室内へ誘う。小さくお邪魔しますという声が聞こえ、ドアが閉まる重い音がした。鍵を掛けたおいてねと伝えてから、紅茶派の真由子の為に紅茶を用意する。程無くして現れた真由子に、私は無言でマグカップを付き出した。真由子は両手でマグを包み込むと、温かいねとようやく軽く微笑んだ。

「とにかく座つて。お茶もお菓子も結構あるから、ゆっくりと話そう。ここが落ち付かなければ部屋のテーブルでダラダラ・コースもOKだよ」

「ダラダラつて」

「先ず真由子の気持ちを解したかつたので、直ぐに『JRJRJR』でもいいけどね」と付け足した。

今度は笑顔。上手く行つて良かつたと少し安心する。

「で、どっちにする。部屋行く?」

真由子がこくりと頷いたので、トレイに用意してあつたお茶道具をそのまま持つて移動した。ポットは乗らなかつたので一度往復。往復しながら真由子に伝える。

「そこいら辺りのクッショントかブランケット、適当に使っちゃつて。ベッドに腰かけちゃつてもいいし。真由子の楽な格好で落ち着いちやつてくれる」

解つたという返事をして真由子が部屋に消える。そこで思い出した。昨日届いていた本。ベッドサイドに置きっぱなしにしてある。話したいことつてあの本の事じゃないだろうか。

「失敗した…」

くだらない話題からさり気無く本題に移れるようことが想えていたのに、本を見付けられたら即本題に入ってしまうだろう。しかし、さつたと本題を促した方が、却つて無理をさせないで済むかもしれませんと、前向きに考え直した。

部屋に戻ると真由子がベッドに腰掛け、手近にあった大きなクッションを抱え込んでいた。彼女の右手には例の本。無表情で見つめる瞳が冷ややかだった。

「安美、読んだ？」

沈んだ声の問いかけに、私はこくりと頷いてポットを置くと、真由子の真向かい側にぺたりと座り込んだ。

「真由子の書く話っぽいよね」

この言葉に真由子が固まつた。もしかして地雷を踏んだかもしないと焦る。

私から話しきを振るには気が引けるし、真由子も話そつとはしそうにない。沈黙は重く、時だけが進む。置時計が秒針を刻むチッチッチという音がやけに耳に付き、気持ちは居心地の悪さにざわつく。ここは一先ず息を抜こうということで、まだトレイに乗つたままの自分のマグカップに手を伸ばし、中の液体を口に含む。含んだ瞬間に真由子が言つた台詞は、思いきり私を驚かせた。

「私のなんだよね。その作品」

真由子の言葉に含んだ紅茶が音を立て喉を通過した。勢いが良かつたらしく、一部が気管へ入り、私は激しく咳込んだ。咳込みながらも、どういうことと問う事は、勿論、忘れなかつた。

「新しい担当が付いたって、前に話したっけ」

確かに半年くらい前だつたと思つ。デビューからずつと一緒に仕事をしてきた女性編集者が産休に入るという話を聞いたのは。新しい編集が男性で、あまりヤル気の見えない人物で戸惑つているといふことも言つていたなあと、頭を半年前に巻き戻し再生してみた。

「担当と合わないって言つたね」

「その担当にね…」

真由子がそこで口籠る。本をベッドに置いて表紙を指でなぞる。

「『』の作家のゴーストにされたの。勝手にね」

「はあ、何それ！」

出版社の編集ともあるう者が盗用なんて真似をするのか。腹が立つ以上にショックの方が大きい。真由子の書いているのは、小さいながらも長い間良い作品を出版している、本読みの中では老舗の評判の良い会社だ。真由子の冷え切つた姿を思い出して悔しい気分になる。そんな様子になるのも当然だった。

「書いた原稿、全く手を加えないで、そのまま本にされた」
きつく、きつく、真由子がクッションを抱き込む。声の調子は淡淡としたままのが恐ろしい。さっきまでは泣くのかと思っていたが、そうではなく、極限まで怒りを抑え込んでいるらしい。その姿は、ひんやりとした冷氣まで放っているようを感じる。

「抗議したら、『売上の6%をゴーストライターに支払う事に、先方と話し合って決めたから』だつてよ。名前だけでその作家は何%かの売上持つてくつことじやん！」

「そ、そうだよね」

「しかも、最悪なのが『彼の方が名前が売れてるから、会社の売上も上がって、しかも貴方の普段の印税よりも良い金額になるんじゃないですか。うちも普段彼に払う印税よりも出費が低く抑えられるので大助かりなんです』って、ざけんじやねえよ！」

噴火した。物凄い溶岩流が噴き出してる感じがする。そりゃあ、噴火もするわなあ。馬鹿すぎだわ、その担当。しかも正しいと思つてる節がある台詞回し。出版社にいちゃいけない奴だなと、激流を受止めながら思つ。普段が口べたなのに、この饒舌っぷり。どれだけ心の内で怒りを反芻していたのだろうか。少し逃げたい気分になつてくる。

「私に無許可よ、無許可！ 先方の作家や編集長には、私がOK出したつて言つてたらしいのよ。見本誌を編集長から送つてもらつて、

初めてそんなことになつてゐるつて知つたのよー。」

怒りが治まらない真由子は、抱いていたクッショוןを大きく振り上げ、ベッドに叩き付けた。私のお気に入りのクッショൺ… 買つた目的は似たような用途だから、まあ、良いけれど、生地が破けたりしないか少し心配になる。

「編集長に電話してそのこと言つたら大慌てしてたわ。で、詫びは入れてもらつたけど、この作品は、公式的には私の作品ではないってことにしてくれつてさ」

「うわ、最悪だわ。作家にその仕打ち」

流石にこれには黙つて聞いていられなくなりを口出した。

真由子は売上よりは作品を読んでもらいたいタイプの作家だ。普段は事務職をこなし、仕事が終わつてから作品を書く。休日や有給を取つて、編集部と打ち合わせをしたり校正をしたりしている。本当に書くのが好きなんだなあと、社会人になつて書くのを止めてしまつた私は、いつも感心して作品に目を通しているくらいだ。

読者には夢を見せたいと言つて、甘過ぎると言われるような、ファンタジックや感傷的な作品を書く事が多い。盗用された作品も彼女らしい、最後は心がほわつとするような温かな作風だつた。

「本の帯にさあ、『待望の新作！これは彼の新境地だ！』とか書かれてて。私の書いたモノだから、新境地も何も無いいつつの…」
本の内容を思い浮かべて、私は溜息を吐きたくなつた。目の前の彼女が書いた作品だとは、今はとても思えない状況である。

「お金が欲しいとか、そういうことじゃなくてさ、自分の話が他人のモノになつちゃうんだよ。納得し合つてるならいいけれど、書いた本人がこんなに納得出来てないのに、会社側はお金で無理やり納得するようつて言つてるみたいじゃない」

「うんうん」

もう、全部吐き出せりやつた方がいい。腹を括つてとにかく聞く。そう決めると何だか気楽に構えていられる気分になつた。

合間にお茶を継ぎ足し、ひたすら相槌。愚痴も途中から同じ事を

焼き増ししたようになってしまった。

怒っていると思ったことが口からポンポン飛び出してくる。自分も経験があるから解るけれど、頭が沸騰して居た間にかく話すだけ話してしまわないといけない。そして、人に話す隙を与えない。学生時代に自分が全く同じ事を真由子にやつたなあとしみじみ思い出した。

小休止を挟みながら、ハイテンションで語り続けていた真由子も、疲れてきたのか喋りのトーンが、段々と落ち着いた色を帯びてきた。外は陽が落ちかけている。テーブルのお菓子も既に残ってはいない。

「あー、疲れた」

ようやく真由子が話すことごとに根を上げる。

「そうだねえ」

私も聞き疲れてぐつたりだ。お互い暫し沈黙。しかし、それを破るようすに真由子のお腹がグググと鳴った。思わず顔を見合わせる。すると私のお腹もキュルル~と続いて鳴った。一人で爆笑。ようやく明るい感じになった。

「ねえ、『飯食べに行こうよ、』『飯。お腹空いたってば』

笑い過ぎて浮かんだ眼尻の涙を、指で拭いながら私は言った。

「そうしよう。お菓子だけじゃ駄目だつてお腹に催促されたしね」いつもの調子が戻ってきた真由子が、早々に立ち上がる。私も立ち上がりコートを手にした。昨日放り出したままのショルダーを手にし、準備万端だ。

真由子もコートを羽織り、バッグを肩に掛けていた。大きめで何だか重そうに見える。何気なく覗きこむと厚めの茶封筒が入っている。

「何か荷物重くない。中身出してくださいば」

「え~、うん…まあ、大丈夫だから持つてく。帰る時うつかり忘れても困るものだからさ」

返答に少し躊躇いがあつた感じがするが、とにかくご飯が先だ。

何を食べるか一人でわいわい騒ぎながら外に出た。

外に出て少し歩くと、お互いかなりお腹が減つていると気付き、直ぐに食べられる場所でということにして、回転寿司屋で食事をすることにした。入るなり黙々と食べるだけの女一人に、店員さんはさぞかし驚いたというか、引いただろうと思つ。店内で会話を始めたのは、すでにかなり満腹になり、ゆっくりとアガリを啜つている時であった。

「夜景見に行かない？」

ポツリと言つたのは真由子だった。

「夜景かあ。ここら辺だと20分くらい歩けば高台に行けるけど、展望台とかは無いよ」

「構わないよ。とにかく高いところだつたらいいかなあ」

真由子は何か含む所があるような言い方をしていた。

「じゃあ、腹ごなしに歩きますか」

席を立ち一人でレジへ向かう。会計を済ませて外に出ると、この季節にしては暖かい風が吹いていた。

「いい風だね。ちょっと強いけど」

舞い上がる軽いウェーヴの髪を抑えながら真由子が穏やかに笑う。散々語つて少しばかりが済んだのだろうか。

だらだらとくだらない話をしながら、近くにある小高い丘へと向かう。そんなに高い場所でもないし、しつかりとした設備がある公園でもない。ただ単に少し高台にある広場といったもので、少数の防風林とベンチが置いてあるくらいの場所だ。夕方だと高校生の恋人同士が時間を潰してしたりする。時々大人の恋人同士もいるが、案外人通りの多い場所なので、いちゃつくには都合が悪い場所だ。そんな場所なので、暗い時間帯でも女一人で来れたりするのだけれども。

斜面側に並ぶ防風林の脇に立つと街が一望出来る。すっかり陽が落ちた街には、家々に温かな光が満ちていた。一人で黙つて街並を見下ろす。

いつやって見ているとただの風景なのだけれど、その中の人々は、さつきまでの私達のように何かドラマを抱えてるのだらう。

学生時代にはそんなことをよく考えていたなあと、真由子を見やる。自分、彼女は今でもそんな事をよく考えているのだらう。そうでなければ、物書きなんてやっていけないのでないだらうかと思う。

「そんなに高い所じやないから、夜景といつよりは、ミニチュアの模型を見る感じがするね」

そう言いながら真由子はバッグの中から茶封筒を取り出す。さつき家を出る時に指摘した重そうなものだ。

「持つて来たんだよね」

そして、寂しげに、泣きそうに、彼女は、封筒を開け始めた。中には出力された原稿が束になつて入つていた。愛おしげに見つめると紙の上に柔らかく指を滑らせる。暫く動きを止め、原稿を見つめ、大きく息を吸い込み、用紙の両端を掴むと、思い切つて左右に引き裂き始める。

「パソコンのデータは家を出る前にキレイに消してきた。これを処分したら、この作品は私のものでは無くなる。一生ね」

かなりの厚さだった。彼女が紡いだ夢は、丁寧に、生み出した者の手によつて、小さく、小さくなつてゆく。小さな紙片に変わった夢は、舞台で使う紙吹雪くらいのサイズに千切られ、入つていた茶封筒の中に再び収まつた。

茶封筒を抱えて夜景を見下ろしてから、真由子はゆっくりと辺りを見回す。私も釣られて同じような動作をする。人影は無かつた。人がいないことを確かめたかったのだらう。真由子の取つた行動がそれを物語つた。

彼女は紙片掴み取り、思いきり斜面の向こうへと撒き始めた。風が吹き上がり、その風に舞い上がつた紙片は、ゆっくりと宙を漂つた。

「雪みたい」

真由子が言つ。

「春なら桜の花びらに見えるよ」

私は言った。

彼女の夢がはらはらと散る。舞い上がり再び彼女の元へ。失ったものは元には戻らない。けれども、再び降り積もつて新しい苗床を作るだろう。その苗床は大きなものが育つかもしれない。

手元に降りてくる無数の夢を彼女は両手を広げて迎え入れる。そしてようやく一筋涙を流した。

「思いつきり泣いとけ！」

その言葉で何かが外れたかのように、真由子は顔をくしゃくしゃにし、大粒の涙を流し、大きく声を上げて泣いた。

街へ何かを訴えるように見えるその姿を少し離れて見守る。通りすがりの人人が怪訝な表情でこちらを見るが気にしない。

どれくらい時間が経つたのかは、正直、判らなかつた。グスグス鼻を鳴らしながら私の元へやつてきた真由子は、開口一番に「意地悪」と言つた。

「放つておいた方が思いきり泣けるでしょ？」

学生時代に言われた台詞をそのまま返してから、私は彼女の頭を抱え込んだ。

「馬鹿あ、また泣くじやん」

子供をあやすように真由子の背を軽く叩く。彼女は、少しの間、されるがままにしていたが、時間が経つに従つて、流石に恥ずかしくなってきたのか、遠慮がちに私を押し退けた。

「…もういい」

「はいはい。全部出し切つたかな」

「出しきつた…と思います」

赤い顔で真由子が言つた。泣いていたせいか、恥ずかしいからか、どちらで顔が赤いのかは判らないが、表情はすつきりとしていた。

「じゃあ、帰りましょうか。泊まつてくれでしょ？」

「うん、是非泊まらせて。泣き疲れたよ」

苦笑しながら話す真由子は、少し楽しそうな様子に見えた。

「あのさあ、思つんだけど…」

真由子が視線を街並に向ける。

「例の雪…花びらでもいいけれど、あれって不法投棄だつたりする？」

「でしょ？ つて、今更何を言つてるかな、この子は…」

すっかり元気になつたらしい真由子を見て私は嬉しくなつた。

降り積もつた夢は、この次にどんな芽を育てるのだろうか。案外面白いものが育つかもしれない。少し先を想像しながら、私は思わず顔が綻んで来るのを感じた。

真由子は今度の事をこれから先どのように処理していくのだろうか。多分無駄にはしないだろう。きっと自分の中で昇華させ、失くしたものより大きく深いものを生み出すに違いない。何だかそんな気がしてくる。

真由子が手招きする。私は笑顔で答える。

私達は足取りも軽く、温かな明かりが灯る街並へと向かつた。

(後書き)

久しぶりに小説を再会した直後に書き始めたものです。案自体はかなり昔に浮かんでいたものでしたが、ラストシーンは書いたものとは全く事なり救い難いものでした。それが嫌だつたのか、キャラクターがいきなり激怒（笑）。気がつけばかなり違つた終わり方になつてしました。キャラの暴走という話は良く聞いていましたが、自分のキャラが暴走するのは実は初体験で、かなり「何で、何でどう動く！」とパニックになつたことが作品を書いていた時の一番の思い出です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6546n/>

降る夢

2010年10月8日14時14分発行